

## 近未来への種蒔き

佐藤 学  
(山形大学)

最近、インターネットの普及に伴い、キーを叩くだけでさまざまな情報が入手可能であり、過剰なほどに便利な世の中である。われわれが気になる近未来の情報も例外ではなく、それらの内容は、人口変動、GDP などの世界情勢や主要成長産業などが一般的である。光学に関係する成長分野は多岐に及ぶが、重要なところでは、モノのインターネットも含めたフォトニクスと関係が深い情報通信関連分野が挙げられよう。

わが国の競争力に科学技術の持続的な革新や発展は必要不可欠であり、そこで大切なのは人材であることは自明である。危惧されるのは“理科離れ”であり、これは最近の問題ではなく、日本に限らず先進国共通の課題である。20 年ほど前に英国の大学教員を案内したときも、まさにこの話題となったのを覚えている。特に問題は、理科の成績はよくても学年が上がるにつれて興味が薄れることである。これは社会全体で対策すべき課題であり、ここ数年、いろいろな学会で取り組みを積極的に行っているのは、周知の通りである。

人材育成には短期と長期の両眼で腰を据えてじっくりと対峙すべきであるが、現実にはどうであろうか。ここ数年、特に教育機関を取り巻く環境は、人的・物的の有効活用のもと、さまざまな面から対応が必要とされている。限られた時間の議論を通し、向かうべき課題に十分対応していくことは容易ではない。企業においても、この時代、高いモチベーションをもって積極的に研究開発を行う優れた人材を育成する環境整備はそう容易ではないと思われる。これらに対して、近未来に向けて種蒔きすべきはまさに今である。教育機関でも企業でも、厳しい状況の中、先を見据えてどのように、どの種蒔きをするかが問題である。種は環境を整えれば確実に芽を出し、ある程度離れたほうが大きく育つようである。

従来、「光学」は、編集委員会での議論を通して特集を企画し、幅広い情報を会員の方々に届けてきた。“光学”を産業の中で育成する意味から異分野との交流が広められてきたが、さらに社会のニーズの感度を高めて戦略的に交流の幅を広げる必要も感じられる。この 4 月号では、光学の国内情勢を主要として、第一線の方々に国内外の状況をご執筆いただき、多様な切り口での情報が盛り込まれている。今回もお忙しい中、ご執筆いただいた方々に感謝するとともに、本誌が多くの方々の目にとまり、さらに異分野の方々の興味を引いて、新しい芽が大きく成長することを期待したい。